

初対面会話における対人関係構築プロセスの研究概観－会話データからの研究を中心に－ 張 瑜珊

詳細目次

1. はじめに
2. 初対面会話の研究理論背景
3. 初対面会話のプロセス研究へのアプローチ
 - 3.1. 構造分析
 - 3.2. 関係構築分析
 - 3.2.1. アプローチを支える理論：Svennevig(1999)の関係性モデル
 - 3.2.2. 関係構築プロセスへの二つの観点
 - 3.2.2.1. 連鎖内での関係構築(局所的)
 - 3.2.2.2. 時間の推移から見る関係構築(時間軸)
 4. 初対面会話における関係構築プロセスの研究概観
 - 4.1. 自己呈示的連鎖を切り口とする研究
 - 4.1.1. カテゴリー化の質問の研究
 - 4.1.1.1. (局所的)単一の母語話者の研究
 - 4.1.1.2. (局所的)身上的情報に関する対照研究
 - 4.1.2. 情報要求発話の研究
 - 4.1.2.1. (時間軸)情報要求発話の対照研究
 - 4.1.2.2. (時間軸)接触場面と母語場面の比較から見る情報要求発話
 - 4.1.3. 情報交換の研究
 - 4.1.3.1. (局所的)単一の母語場面における話題内の情報交換の対称性
 - 4.1.3.2. (時間軸)接触場面と母語場面の比較から見る自己紹介の情報交換
 - 4.2. 話題を切り口とする研究
 - 4.2.1. 話題の導入・開始方法の研究
 - 4.2.1.1. (局所的)単一の母語場面の話題導入に関する研究
 - 4.2.1.2. (局所的)接触場面と母語場面の比較から見る話題開始部
 - 4.2.2. 話題の内容に関する研究
 - 4.2.2.1. プロセスの観点を伴っていないもの
 - 4.2.2.1.1. 単一の母語場面の研究
 - 4.2.2.1.2. 対照研究の研究
 - 4.2.2.1.3. 接触場面と母語場面の比較
 - 4.2.2.2. プロセスの観点を伴っているもの
 - 4.2.2.2.1. (時間軸)単一の母語場面の研究
 - 4.2.2.2.2. (時間軸)対照研究の研究
 - 4.3. サイドシーケンスを切り口とする研究
 - 4.4. スピーチレベルシフトを切り口とする研究

- 4.4.1. (局所的) 単一の母語場面の研究
 - 4.4.2. (局所的) 対照研究の研究
 - 4.4.3. (局所的) 接触場面と母語場面の比較
 - 4.4.4. (時間軸) 接触場面と母語場面の比較
 - 4.5. まとめ
5. おわりに
- 稿末注
- 参照文献

初対面会話における対人関係構築プロセスの研究概観 —会話データからの研究を中心に—

張 瑜珊

要 旨

本稿は、留学生と日本人の対人関係構築に示唆を与えるため、初対面会話に焦点をあて、関連する論文を概観する。それによって、初対面会話における対人関係構築プロセスのメカニズムについて、どのように研究がなされているかを明示することが目的である。

まず、初対面会話の研究理論背景を歴史的な流れに沿って紹介する。そして、近年実際の言語行動から行動の様子を抽出する分析手法が多くなっていることを鑑み、本稿では実際の会話データを対象にした研究を中心に、初対面会話のプロセスへの研究アプローチを明示する。

次に、その中から関係構築分析というアプローチに注目して、四つの切り口(自己呈示的連鎖、話題、サイドシーケンス、スピーチレベルシフト)を枠組みとし、関連する初対面会話研究の文献を概観する。中でも特に、分析項目ごとに、局所的／時間軸という関係構築プロセスの分析観点と、母語場面、対照研究、接触場面というデータの対象の観点で、文献を分類し紹介する。これらの研究をふまえ、最後に今後の留学生と日本人の初対面会話研究への提言を行う。

【キーワード】対人関係、初対面会話、関係構築プロセス、局所的／時間軸、話題

1. はじめに

ウーさん：先生、日本人の人たちは、どうして初対面のとき、あまり自分のことを話さないですか？台湾だったら、お互いの仕事のことなどを聞きあつたりするのですが、日本ではありませんね。

長谷川先生：うーん、日本人は最初から、相手に自分のことを全部言うのは恥ずかしいという気持ちがあるからじゃないかな。

ウーさん：一生懸命共通の話題を探して話すんですが、あまり返事をしてくれないことも多く傷つきます。

長谷川先生：日本人の場合は、最初からあまり深く聞かれると「なんで、この人は、私のことをそこまで知りたいんだろう」っていう気持ちになるのかもしれないね。

ウーさん：はー、そうなのかー。特別な気持ちはないんですけど…。日本に来て始めのころはテンションを上げて話していたけど、最近はだんだん話すときのテンションも下がってきました。

長谷川先生：もったいないねー。

(多文化共生マガジン J-Life 2005(2): 22 より
出版社の承諾のもとに転載)

この対話において、留学生である「ウーさん」は日本人との初対面会話及びその後の交友関係で経験

した悩みを、日本語学校の進学担当の「長谷川先生」に相談している。日本では、留学生十万人計画達成後の2007年の現在、約十二万人の留学生が勉強している。そのうちの80%は大学院、大学(学部)・短大・高専に所属している¹。このように、大学等の高等教育機関に留学生が多数在籍していることから、それら留学生と頻繁に接触機会を持つ日本人大学(院)生が多数いることも当然推測できる。「ウーさん」と同じように日本人との初対面会話が思い通りに運ばず、日本人との友人関係に悩む留学生もまた、数多くいることだろう。

現に横田(1991)の調査では、留学生は日本人学生との友人関係を形成することに意欲が高いにも関わらず、実際には留学生同士で固まる傾向が見られ、日本人学生との親密な友人関係が欠如していることが分かった。その親密化を阻害する一つの要因として、横田(1991)は、日本人・留学生間の友人関係形成初期における課題の違いアプローチの差と話題領域の相違一を挙げた。日本人学生は集団単位で友人関係形成を始動するというアプローチを取る一方、留学生は一対一の関係を基本として考えているという。さらに、日本人学生の話題が表面的で意見の主

張がないのに対して、留学生は本質的な事柄について意見や主張をぶつけ合うことが重要だと考えているようである。このようなアプローチの違いが、両者の関係を親密になることを阻む要因であると推察される。

これまでの友人関係の親密化過程に関する研究は、大別すると二つの考え方に基づいている(山中 1995: 127)。一つ目は 1973 年に Altman & Taylor が提示した社会浸透理論²のように、対人関係の親密化を段階的プロセスとしてとらえる(榎本 1997)ものである。この段階的に捉えるプロセスでは、親密的関係は時間をかけて徐々に変化していくという。二つ目は、それと対照的な主張で、Berg & Clark(1986)が、親密な対人関係は関係形成のごく初期に形成されると指摘した研究のように、親しい間柄になれるかどうかは、出会って間もない時点での両者の関係に左右される、と考える立場である。山中(1995, 1998)は 11 名の新入生を対象に、日本大学生の友人関係の親密化過程を調査し、量的アプローチだけでなく、面接という質的アプローチも行った。その結果、出会いの初期にささいな類似性だけで友人選択が行われていたという。この結果は、Berg & Clark(1986)の「初期意思決定」の仮説を支持するものである。本稿は留学生と日本人学生の対人関係に関する問題を出発点とするものであり、日本人学生間の友人関係生成について研究を行った山中(1995, 1998)の結果から示唆を得ている。そのため、本稿では、対人関係については、初期段階で一定の関係性が決まるという前提で論述していくのを断つておく。

山中・廣岡(1994)は、日本大学生間の対人関係は出会ってわずか 2 週間で予測することが可能であるとしている。言い換えれば、山中の一連の研究あるいは親密化の一連の研究は、対人関係の「初期段階」に注目していることになる。しかしながら、冒頭に示した対談のように、留学生「ーさん」は日本人との関係において、「初期段階」の開始部分つまり「初対面」のコミュニケーションに困難を感じ、その結果、その後の付き合いに支障が生じるという現状がある。そこで、「初対面会話³」に焦点を絞り、以下の通り研究を概観していく。

本稿はまず第 2 章で初対面会話に関する研究の歴史的流れを紹介する。次に、会話データから分析を行った研究に焦点をあて、初対面会話のプロセスを

どのように捉えるかについて第 3 章で述べる。続いて、第 4 章では、初対面会話における関係構築のプロセスの解明に、収集した研究を四つの切り口(自己呈示的連鎖、話題、サイドシーケンス、スピーチレベルシフト)から分類し概観する。その際、四つの切り口の下に、分析項目によってさらに章立てをする。その中には、第 3 章で述べる局所的／時間軸という関係構築プロセスの分析観点と、分析データの種類(単一の母語場面、対照研究、接触場面)によって、それらの研究を分類し記述する。最後に、第 4 章で概観した研究から今後の展望を付す。

2. 初対面会話の研究理論背景

初対面における言語行動と対人関係の関連については、社会心理学では膨大な研究がなされているものの、談話分析の分野では、初対面会話に注目する調査が限られている、という指摘がある(Svennevig 1999: 2)。

一方、社会心理学における初対面会話は、先述した通り 1973 年に初めて提唱された社会浸透理論をはじめ、「自己開示」という概念に基づいて研究がなされている(榎本 1997)。自己開示の度合いは、親疎によって異なると考えられている(Dindia, Fitzpatrick & Kenny 1997)。自己開示の度合いに関する文化間の差異を調べた研究には、Barnlund(1975/1979)の日米比較、曹(1992)、三矢(1995)の中日比較などがある。

社会浸透理論とともに、対人コミュニケーションの分野では不確実性減少理論が提唱された(Berger & Calabrese 1975)。この理論によると、初期交流の第 1 ステージで、面識のない人との接触に当たり、人は不安と不確実を感じるという。不確実性はコミュニケーションの量、情報収集行動の増減、親密度との関係、情報の返報性⁴(reciprocity)などに影響されている。この不確実性減少理論は、その後、Gudykunst, Kim, 西田(西田 2004)などによってしばしば研究されている。

その後、コミュニケーション学において、Kellermann & Lim (1989)は、初対面会話のスキーマとして、初対面会話には「記憶組織パッケージ(Memory Organization Packet: MOP)」が存在していると述べている。つまり、レストランで注文する場面と同じように、初対面会話では、一定のスクリプトが含まれている。Kellermann & Lim (1989)が述べ

た初対面会話の記憶組織パッケージには開始フレーズ、維持フレーズ、終結フレーズという三つのフレーズが見られ、その中に、それぞれのシーンが含まれており、各シーンの中で各種のスクリプトが存在する。記憶組織パッケージにおけるシーンとは話題中心(topic-centered)であり、つまり、シーンは話題として考えられるのである。Kellermann & Lim (1989: 178)から分かるように、開始フレーズには、あいさつ、自己紹介、健康、現状を表すなどのシーン(話題)がある。そして、維持フレーズには、どこに住んでいるか、出身故郷、共通の知人、仕事は何かなどのシーン(話題)が見られる。最後に終結フレーズには、近い将来の再会への言及、出会いの評価、再会を計画する、相手への肯定的評価などのシーンが含まれる(図1を参照されたい)。会話者は会話の相手をどれだけ知りたいかによって、シーン(話題)を選択する。シーン(話題)の順序と選択は柔軟性があるという特徴を持つが、会話の進行は一定のルーティンがあると考えられるという。

近年、人間関係に関わるものについては、人の意識と実際の行動は必ずしも一致するとは限らないため、実際の行動を研究する必要がある(中山2003)と言われるようになった。そのような研究の流れからは、会話分析や談話分析の手法を取り入れる傾向が見られる(Maynard & Zimmerman 1984; Svennevig 1999; 中山2003)。

初対面会話では、見知らぬ両者が出会った瞬間から、会話のプロセスにおけるダイナミックなやり取りによって、一定の関係性を築いていくと想定でき

る。そのため、会話のプロセスの中で、会話者がどのような言語行動をし、それがどのような関係構築に繋がるかに関心を向けなければならない。そこで、本稿では、実際の会話行動を分析対象にした研究を概観する。特に、初対面会話のプロセスにおける対人関係構築に関する研究を中心に以下見ていく。

3. 初対面会話のプロセス研究へのアプローチ

初対面会話のプロセスは、会話の開始から終了まで一定の時間で行われる言語行動だと考えられる。そのプロセスをプロダクトとして構造的な側面から捉えるものもあるが、一定の時間内で会話者間の関係性をどう構築していくかという分析をするものも見られる。また、関係構築のプロセスを探るものには、局所的連鎖の塊から、プロセスを探求していく研究と、ある言動を時間の推移によって物理的な時間帯で現れる変化を取り上げる研究がある。

そこで、本章は初対面会話のプロセスの研究に当たって、構造分析と関係構築分析というアプローチに分けてそれぞれ論述していく。関係構築分析アプローチでは、さらに、連鎖内で形成する関係構築の観点(本論では「局的的」と称する)と時間の推移による関係構築の観点(本論では「時間軸」と称する)を分類して説明する。

3.1 構造分析

初対面会話のプロセスを構造的に見たものとして、ここでは宇佐美・嶺田(1995)の日本語母語話者についての研究を取り上げる。宇佐美・嶺田(1995)は、11の会話データから話題を抽出し、その内容を分

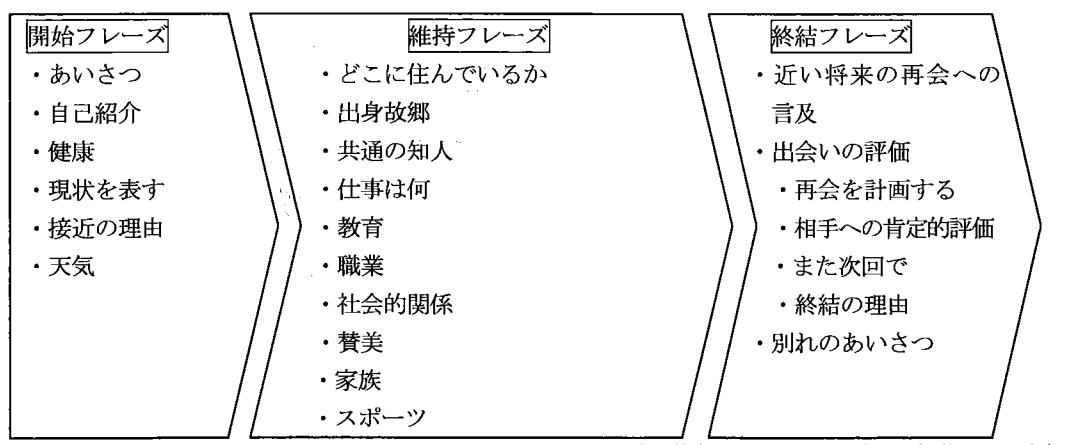


図1 初対面会話の記憶組織パッケージ

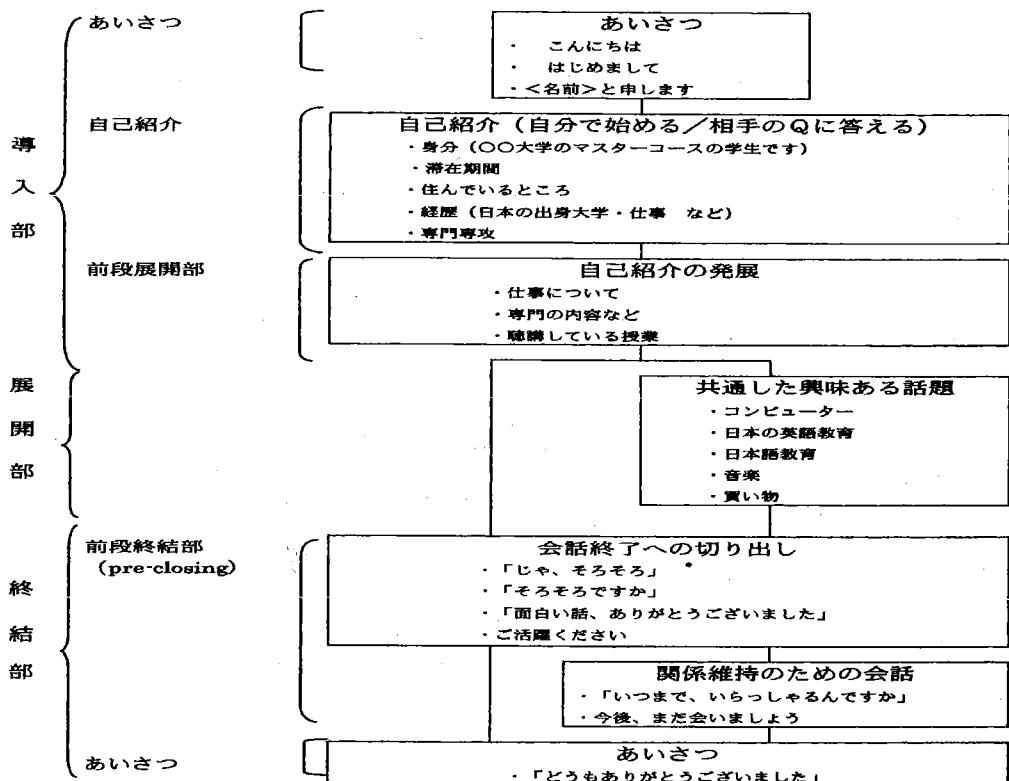
類した結果、初対面会話が電話会話のように「導入部」と「展開部」と「終結部」に分けられた。導入部には、あいさつ、自己紹介と、前段展開部という下位分類があり、終結部は、前段終結部とあいさつからなる。さらに、前段終結部では、会話終了への切り出しと関係維持のための会話というやり取りに分かれる。その流れは図2のようになる。

本文では言及されていないが、このような流れは先述した Kellermann & Lim (1989)が主張した三つの初対面会話のフレーズ：開始フレーズ、維持フレーズ、終結フレーズと類似していると考えられる。つまり、宇佐美・嶺田(1995)でも、初対面会話のプロセスには開始から終結まで一定のルーティンがあると見られている。

張(2005)は宇佐美・嶺田(1995)で示された会話の流れをもとに、台湾と日本の女子大生同士の対照研究を行った。会話の開始から5分間を分析対象にして、主に会話の導入部と前段展開部について台・日の相違を検討した。その結果、構成面に関しては、

日本人ペアは宇佐美・嶺田(1995)の研究とほぼ一致する流れが観察された。しかし、台湾人ペアは導入部内の前段展開部(自己紹介の発展)は自己紹介のすぐ後に観察されなかった。言い換えれば、台湾人ペアの導入部は日本人ペアより短く、すぐ展開部に入ることが分かった。

また、接触場面を研究した樋口(1997)は、初対面における「自己紹介」の部分に焦点を絞り、母語話者同士の会話と母語話者対非母語話者⁵の会話を比較した。母語話者同士ははっきりした自己紹介という固まりを観察することができるのに対して、母語話者対非母語話者ペアでは、自己紹介部という区別が見られず、すぐ話題に発展するケースが多かった。これらの研究から、日本人同士の初対面会話のプロセスの中には一定のルーティンがあり、それが構造として明らかであることが分かる。すなわち、日本人はそれらの段階を確実に踏まえながら対人関係を築いていくと考えられる。一方、張と樋口の研究から、日本語非母語話者の初対面会話では、それらの



(宇佐美・嶺田 1995: 139 から、第一著者の承諾のもとに転載)

図2 会話の流れ

段階が明確に踏まれないことが分かり、構造の側面において日本語母語話者と日本語非母語話者は異なる言語行動をとることが窺える。

3.2 関係構築分析

本節では前節と異なるアプローチから初対面会話のプロセスを探求する理論と研究を紹介する。前節では会話のプロセスを構造的に捉える研究を扱った。そこでは、会話の開始から終了までをいくつかの段階に分け、それらの段階の中でどのような言語行動があるかを解明し、プロセスが提示される。しかし、このようなプロセスの捉え方は、ルーティン行為に注目が集まれ、会話の当事者らの局所のダイナミックな関係構築の行為を見落としがちだと思われる。

それゆえ、本節はまず、会話による関係構築に関する理論を導入する。次に、関係構築のプロセスを解明するのに、使われている二つの分析観点を説明する。一つは会話の中で、ある局所的な部分に注目し、その連鎖内による関係構築の仕方を捉える「局所的」という観点である。もう一つは特定の言語行動を取り上げ、その言語行動が初対面会話の開始から時間の推移によって変化の様子を捉える「時間軸」という観点である。

3.2.1 アプローチを支える理論：Svennevig(1999)の関係性モデル

本項はまず Svennevig(1999)による会話と対人関係に関する見解を紹介する。

彼はアイデンティティと社会関係性について概観し、両者を統合するモデルを提案した。まず、彼は Goffman(1959)の指摘に従い、自己(self)は相互作用(interaction)によって構築されているものであると主張する。つまり、自己は開示(disclose)と言うより、むしろ呈示(present)される、構成(construct)されるものだという(Svennevig 1999: 22)。一方、社会的関係に関しては、連帯感(solidarity)、親しさ(familiarity)、そして好意(affect)の三つの次元を取り上げた。この三つの関係次元は共起する必要がない。例えば、共通したグループのメンバーは単に連帯感を成立させるが、親しさと好意を必ず含むわけではない(Svennevig 1999: 35)。

この三つの社会的関係の次元と対人関係との関連は表1のようになる。Svennevig(1999)は三つのレベルの対人関係(知人、友達、恋愛関係)を提示したが、本稿では対人関係の起点である見知らぬ他人との関

係のレベルを付け加えた。

表1 社会的関係の次元と異なる対人関係との関わり合い

次元 対人関係	連帯感 (solidarity)	親しさ (familiarity)	好意 (affect)
見知らぬ 他人	—	—	—
知人関係	+	+	+/-
友達関係	+	++	+
恋愛関係	++(+)	++	++

(Svennevig 1999: 36 に加筆。John Benjamins Publishing Company の承諾のもとに転載。訳は筆者)

一般的に理解されるように、見知らぬ他人との関係は、連帯感、親しさ、好意がすべてない状態である。しかし、表1で示すように、知人(acquaintance)という関係になるためには、連帯感と親しさが必要とされるが、好意が相互作用の度合いによって生成されたりされなかつたりする。連帯感には、相互的権利と義務が含まれている。具体的には、連帯感を示す最小限の相互的義務はあいさつの交換などが考えられ、最小限の相互的権利は会話参加に保障されるという(Svennevig 1999: 36)。さらに、親しさの特徴は、相互的個人情報の知識の保有という言語行動が考えられる。親しさは協働活動(joint activity)によって互いの情報を獲得することにも見られる。

これらの関係次元を考察するために、言語的・語用的アプローチと会話分析の手法が肝要であると主張されている(Svennevig 1999)。Svennevigは、会話分析の手法で初対面会話の局所的な連鎖を中心的に分析した。一方、関係構築におけるある特定の言語行動の変化を、時間の推移とともに追う分析方法も用いられてきた(奥山 2000, 2005; 奥山・泉 2001; 佐々木 1996, 1998; 張 2006a, 印刷中; 伊集院 2001, 2004)。つまり初対面会話のプロセスを関係構築という分析アプローチから見るには、局所の連鎖内による言語行動の観点と、時間の推移による言語行動の変化という観点があることが分かる。以下、この二つの観点についてそれぞれ論述していく。

3.2.2 関係構築プロセスへの二つの観点

まず、局所の連鎖から関係構築プロセスを分析した Svennevig(1999)が用いた分析観点に注目し、次に、時間の推移による言語行動の変化の分析観点をまとめていく。

3.2.2.1 連鎖内で見る関係構築(局所的)

会話そのものからどのように社会的関係を構築していくかという手がかりは、Svennevig(1999)によつて、関係のコミュニケーション(交際言語コミュニケーション、スマートトーク)、フェイスワーカとポライトネス・ストラテジー、関わり合い(involvement)と会話スタイル、共通基盤の構築という章立てで論じられた。つまり、言語的手がかりから、対話者の関係を検証することが可能であると言えよう。

言語的手がかりを分析する具体的な手立てとして Svennevig は、「自己呈示的連鎖」「話題の披露」「サイドシークエンスと共通基盤の構築」という分析観点を提唱している。最初に「自己呈示的連鎖」とは、面識のない人と出会うときの典型的な質問とその後の返答の一連の発話である。従つて、自己呈示的連鎖の出現はお互いを知り合う活動として判定できる。会話の相手に関する情報の欠如からこのような活動が見られ、情報の分かれ合いから親しさを生み出すことが可能である。次に、「話題の披露」に関しては、話題を 5 つのタイプ(自己指向的話題、相手指向的话題、私たち指向的话題、百科事典的話題とセッティング話題)に区分し、それぞれの導入と連帶感、親しさ、好意という関係次元との関連を調べた。たとえば、個人的な話題が選択されると、フェイスの保持と親しさ・連帶感の生成に役に立つ。セッティング話題は連帶感の増加に関連する。自己に関する話題は親しさに影響するが連帶感に及ばない、などである。最後に、「サイドシークエンスと共通基盤の構築」では、サイドシークエンスを機能によって修復連鎖、モニター連鎖、誤って位置される連鎖、余談、リソース調査に分けることができるという。これらのサイドシークエンスにおける余談とリソース調査は、特に会話参加者の親しさと連帶感の構築に関係している。なぜかというと、余談は、進行中の話題に関連する会話参与者の個人的・自伝的情報がその場で要求あるいは追加される行動であり、個人の日誌情報の提示として使われるからである。そして、リソース調査は共通知識の確立に直接に係るもので、それによって共通コミュニティー成員が作られるからである。

以上は会話の連鎖から関係構築の実態を分析するという観点にあるため、本稿では局所的と名付け、以下もう一つの分析観点を紹介する。

3.2.2.2 時間の推移から見る関係構築(時間軸)

対人コミュニケーションは、相互の理解一心的な共有一を目指して行われ、時間的に連鎖をなす一連の行動過程である。それは、個人、対人関係、社会的脈絡、文化的規範などを要因として含むものであり、時間軸とともに、社会的な広がりのあるメカニズムを持っている(大坊 2005: 118)。つまり、時間の推移によって、個人と個人の関係性がコミュニケーションを通じて変わっていく。そこで、時間の推移による関係構築を分析したところ、会話における言語行動を等価的な時間帯による変化の様子を捉える分析手法が見られた。このような手法は等価的な時間軸という概念を取り入れているため、本稿は 3.2.2.1 で言及した局所的観点と対比し、時間軸と名付けた。

時間軸から初対面会話のプロセスを探求する分析観点は、研究者よつて様々である。本稿は質問詞、話題内容、情報要求発話、スピーチレベルシフトという観点が見られた。それらの言語行動は各時間帯でどのような関係に位置しているか明らかにすることができます。

以上、初対面会話においてプロセスの分析アプローチを構造分析と関係構築分析に分けて紹介した。初対面会話での会話両者は、知らぬ他人から知りあう関係になるプロセスを取り立てるため、以下関係構築のプロセスに重点を置き、論文を第 4 章で概観する。

4. 初対面会話における関係構築プロセスの研究概観

初対面会話では「知り合う(become acquainted)」ことが目的とされている(Kellermann, Broetzmann, Lim & Kitao 1989)。つまり、見知らぬ他人と何らかのきっかけで会話を始め、それを通してお互いがどんな人物かを知り、そしてその人と一定の人間関係を構築すると考えられる。このような初対面会話の関係構築のプロセスを探求するために、どのような分析の切り口があるだろうか。

3.2.2.1 で触れた自然な初対面会話のデータを全般的に観察した Svennevig(1999)から多くの示唆が得られると考える⁶。初対面会話の関係構築プロセスを検討すると、まず、見知らぬ両者は(1)会話の相手がどんな人物であるかを探求するために、相手に質問をしたりあるいは自分を呈示したりすることが考えられる。これは Svennevig が主張した「自己呈

示的連鎖」の観点と一致する。そして、(2)会話者がどのような話題を提起し、それによって会話の相手といいかに連帯感や親しさを作っていくのかが予測できる。この観点も Svennevig の「話題の披露」の概念に相当する。最後に Svennevig の知見から、(3)初対面会話において両者が互いに対しても持つ知識が異なるため、話の主な流れから外れた余談が生じ、余談の中での協働的やりとりを通して、共通基盤ができる。その結果、距離が縮まることが予測でき、つまり、「サイドシーケンスと共通基盤の構築」という観点が浮上する。従って、初対面会話の分析の切り口として、「自己呈示的連鎖」「話題」「サイドシーケンス」が有効であると示唆される。

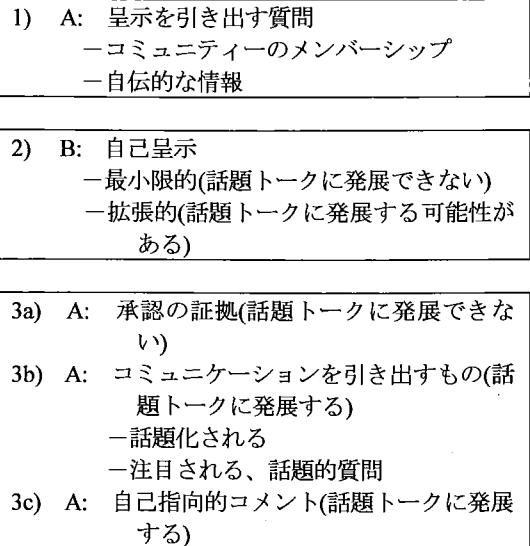
本稿は、日本大学生と留学生の初対面会話に関する研究に対して示唆を与えるため、研究対象を大学生としたもののみを取り上げる。分析データも日本語で行われた初対面会話を中心とする。本稿のデータにおいて、日本語という言語的特徴(敬語⁷)を考察してみると、Svennevig(1999)で取り上げられなかったスピーチレベルシフトという現象が観察された。日本語の初対面では、会話者が心的距離を短縮するために、スピーチレベルシフトをすると言われている(宇佐美 1995; 三牧 2002)。そこで、本章では「スピーチレベルシフト」を四つ目の分析の切り口として取り入れることとした。

本章は上記四つの分析の切り口を枠組みとし、概念的に関連している研究を分析項目ごとに整理していく。また、第3章で述べた「局所的」と「時間軸」プロセスが伴うものを分けて論ずる。各節では、会話者が会話の相手とどのような場面で接触しているのかを明示するため、単一の母語場面、対照研究、接触場面+α、の順番で紹介する。明示されていないカテゴリーは、該当する文献が現在見当たらないことを意味する。

以下、「自己呈示的連鎖」、「話題」、「サイドシーケンス」そして「スピーチレベルシフト」を切り口とする研究の順序で概観し、最後にそれらの研究をまとめる。

4.1 自己呈示的連鎖を切り口とする研究

まず、自己呈示的連鎖について Svennevig(1999)の理論から概観する。自己呈示的連鎖は三つの基本的なムープが含まれている。それを図式にすると以下のようになる(図3)。



A, B とは話者 A と話者 B のこと。1, 2, 3 とはそれぞれ一つのターンとして見なす。

(Svennevig 1999: 100 より John Benjamins Publishing Company の承諾のもとに転載。括弧内の内容と下部の説明を加筆。訳は筆者)

図3 自己呈示連鎖のムープ

この図3を説明すると、まずターン1)では、Aが初対面のBに関するコミュニティの属性や自伝的情報を知るために質問をする。話題トークに発展するかどうかは、その質問に対するターン2)のBの答え方による。Bが最小限的に「うん/はい」や「〇〇/××」しか答えなかつた場合は、Bがそれを話題に取り上げたくないものとして判断される。一方、Bの答えが拡張的ならば、Aのターン3b)の発話によって、その連鎖は話題化される。あるいは、ターン3c)で示したように、Aが自己指向的なコメントをする。つまり、一種の互恵性⁸(reciprocity)的なプロセスが存在する。

図3の連鎖に見られるムープについて考えてみると、ターン1)におけるAの「自己呈示の引き出す質問」のコミュニティのメンバーシップに関する問い合わせは、「カテゴリー化の質問」と考えられる。さらに、ターン1)のAのムープは「情報要求発話」に、そしてターン3c)のAの自己指向的コメントは「情報の交換」という観点に置き換えることができると考えられる。そのため、本章はさらにこれらの分析項目に沿って初対面会話の研究を紹介する。

4.1.1 カテゴリー化の質問の研究

Svennevig(1999)によっての初対面会話における自

已呈示的連鎖は Maynard & Zimmerman (1984)が主張したカテゴリー化するための質問一応答の連鎖に強い影響をされることで同一視できると考えられる。そこで、Maynard & Zimmerman(1984)での概念をまず表し、その後、対照研究を行った張(2006b)の研究を述べる。

4.1.1.1 (局所的)単一の母語話者の研究

Maynard & Zimmerman(1984)によると、英語母語話者間の初対面会話では、共通基盤の欠如のため、対話者を特定のカテゴリーに配置し、そのカテゴリーから予測できる話題を選択するという。言い換えれば「学年は?」「どんな専攻ですか?」などの「カテゴリー化連鎖(categorization sequence)」によって対話する相手の情報を引き出し、話題化していくのである。そして、その質問一応答の連鎖には、さらに「カテゴリー化活動の連鎖(category-activity sequence)」がある。カテゴリー化活動の連鎖とは、既に取り上げられたカテゴリーについて、そのカテゴリーに付随する活動についての質問を指す。たとえば、専攻というカテゴリーに統いて、「どんな授業をとっていますか」などを指す。

4.1.1.2 (局所的)身上的情報に関する対照研究

張(2006b)は台湾と日本の女子大学生同士の 10 ペアずつの初対面会話を調べた。張は Maynard & Zimmerman(1984)を先行研究として、20 分の会話の開始から 5 分の間に、台湾人と日本人が必要とする身上的情報の相違を比較した。台湾人・日本人共に「学科」「学年」「名前」を必要な情報としている一方、「出身」「住まい」「高校」などの情報の場合、台湾人の方が日本に比べて冒頭により近い箇所で取り上げる傾向があった。また、相手をカテゴリー化する行動では、日本人は学校の範囲までしか広げず、台湾人は学校以外のコミュニティにも言及したことが分かった。ただし張(2006b)は、身上的情報は質問による出現方法が殆どだが、発言者が自ら呈示する方法もあると指摘している。

この二つの研究から、初対面会話では、質問一応答によるカテゴリー化連鎖が初対面会話の特徴の一つとして捉えられる。そして、文化によって必要とするカテゴリーには僅かな相違があると考えられる。

4.1.2 情報要求発話の研究

先述したように、Svennevig(1999)は自己呈示連鎖を「面識のない人と出会うときの典型的な質問とその後の返答の一連の発話」と定義している。つまり、不確実性

を減少させるため、相手の所属コミュニティや自伝的情報を聞き出す行動に相当すると言えよう。そこで、本項では、初対面会話における情報要求という発話行為に注目し、文献を紹介する。

4.1.2.1 (時間軸)情報要求発話の対照研究

対照研究の分野では、奥山(2000)、奥山・泉(2001)と奥山(2005)の研究がある。奥山(2000)では、日韓の女子大学生の初対面会話の場面(日:7ペア、韓:12ペアの各40分の会話)で使用されている疑問詞を取り上げ、それぞれの種類と各時間帯(5分間単位)の平均使用頻度について比較した。その結果、どの時間帯においても、韓国人は日本人より疑問詞を多く使うことが分かった。しかし、時間の経過に従って双方とも疑問詞の出現が減っていく。すなわち、初対面の始まりの部分に多数の情報要求行動が見られたと考えられる。

そして、奥山・泉(2001)による日韓の男子大学生の調査結果では、女子大学生と比べ、男性同士の会話が複雑な様相を示していると指摘している。「日本人は前半の20分において5分ごとに急激に「どこ」「なに」という疑問詞の使用頻度が落ちていくのに対して、韓国人は5分以降の時間帯においても急激には落ちず」頻度を保っているという(奥山・泉 2001: 204)。

さらに、奥山(2005)では、奥山(2000)と奥山・泉(2001)の対象を合わせて、各時間帯においての質問と自己開示による話題導入の二つの側面から、日韓の大学生同士の初対面会話を調べた。質問による話題導入の頻度では、韓国人女性が0分-5分の時間帯で他のグループより高く、5分-10分の間に急激に落ちる。韓国人男性と日本人女性は自己開示による話題導入の頻度が質問の形式よりも多く見られて、日本人男性はバランスよく使用していることが分かった。さらに、この論文の興味深い発見としては、日本人と韓国人の女性同士の初対面会話を観察してみると、25分-30分の時間帯において、質問による話題導入と自己開示による話題導入の頻度が全て増加していたという点がある。「この時間帯は初対面当初の相互の不確実性が減少し、不確実性に代わる親しさが増し、いわゆる佳境に入り面白くなってきた時間帯と考えられる」(奥山 2005: 76)。つまり、初対面会話が安定期に入る時間帯がおよそ20分前後であることが示唆された。

4.1.2.2 (時間軸)接触場面と母語場面の比較からみる情報要求発話

佐々木(1996, 1998)は、日本人同士の同文化コミュニケーションと異文化間コミュニケーションにおいて、日本

人の「情報要求」の発話頻度と時間経過に伴う頻度の増減率の相違を調べた。日本人同士、日本人とアメリカ人、日本人と中国人の同性と異性のペアからの 20 分間ずつ、54 の会話事例を対象にし、情報要求発話を「確認」「自己明瞭化」「事実の情報」「意見や感想」という発話の機能に分類し、同文化同士ペアと異文化同士ペアの異同を次のように明らかにしたところ、(1)日本人の情報要求の発話は異文化間で増加し、「確認」「事実の情報」「意見や感想」の頻度に有意な差が見られた。(2)情報要求と時間経過との関係については、同文化同士と異文化同士グループの類似点として、最初の 5 分間に情報要求の発話が集中し、時間経過に伴い頻度が減少する。ただし、その増減の仕方について、両グループ間に最後の 5 分間で相違が見られた。また、同文化同士の情報要求発話の頻度はほぼ一定であるが、異文化同士の方は減少する。この研究は、性差、年齢差、民族、地域、宗教による影響を今後の課題としている。

以上の研究から、初対面同士は最初の 5 分間の段階では、不確実性減少のために、大量の情報要求の発話が予測されることが分かった。また、情報要求発話という観点で行われた研究では、時間軸を伴うものが多く、局所的なものよりもっと広い範囲から、初対面会話の対人関係構築のプロセスを捉えていると考えられる。

4.1.3 情報交換の研究

情報交換の対称性は、社会心理学の自己開示の返報性に相当すると思われる(中村 1990)。自己開示の返報性に関する研究から、初期人間関係形成に大きな知見が得られる(守崎・内藤 2007)。その研究の多くはアンケート調査を通じて行われているが、本稿ではアンケート調査による自己開示の返報性の研究を割愛し、会話データを分析した研究の概観に限定する。

4.1.3.1 (局所的)単一の母語場面における話題内の情報交換の対称性

三牧(1999a)は、日本人男女の大学生の同性ペアを対象に、会話の情報交換の対称性と非対称性について分析を行った。対称的な情報交換とは、一方の会話参与者が自己の出身地について述べた場合にもう一方も自己の出身地に関して述べることを指す。しかし、述べなければ非対称的な情報交換となる。三牧によれば、男女ともにある話題の中で対称的な情報交換と非対称的な情報交換を半々に行うよう巧妙にバランスを取っていることになるという(三牧

1999a: 368)。

そして、社会的な上下関係の面から見ると、下位者は上位者より多くの情報を提供している。しかし、このような現象は、上位者が下位者に情報提供することを要求していることを示し、上位者が会話の主導権を握っていると考えられる。すなわち、初対面会話では、参加者間の社会的地位の上下が区別できる場合は、一定のパターンの情報交換の形式によって、人間関係が構築されていくと言える。ただし、会話全体の情報交換の対称性を論じた研究は見当たらない(三牧 1999a: 364)ため、この分野の研究は充実させていく必要があるだろう。

4.1.3.2 (時間軸)接觸場面と母語場面の比較から見る自己紹介の情報交換

自己紹介の部分の情報交換に注目したのは樋口(1997)である。樋口は日本人ペアの自己紹介部では、名前、学年、所属を交換する割合が 100% 観察されたと述べている。しかし、日本人・外国人ペアの場合は、名前、学年、所属、経歴、出身地などの情報交換が見られたが、相互の交換の割合は低かったという。つまり、日本人・外国人ペアでは、提示されている情報が話題に展開するものが多く、会話の相手から対称的な情報の提示があまりなかったという。

以上から、初対面会話における情報交換の対称性の観点からの研究は少ないと言える。その中で、三牧(1999a)の初対面会話における情報交換は局所的な部分を捉えているが、樋口の初対面会話における情報交換は時間軸の観点を取り込んでいる。言い換えれば、情報交換の対称性という分析観点は、局所的かつ時間軸な分析観点から分析することが可能と考えられる。最後に Svennevig(1999)の自己呈示連鎖の 3 つのムーブに基づいて 4.1 節で取り上げた研究を振り返ってみると、ターン 1)A の自己呈示を引き出す質問に関する研究が多いことが分かる。

4.1 節で取り上げた論文の一覧を次頁の表 2 に示す。

4.2 話題を切り口とする研究

次に、Svennevig(1999)の二つ目の分析観点－話題の披露という概念から、初対面会話における「話題」に関連したものを概観する。Svennevig の話題構成モデルは次頁の表 3 の通りである。

表 3 から分かるように、話題は申し出や指定などにより導入される。そして、首尾一貫した発話の連続で話題が発展する、あるいは、漸進的に移転する。その後、途切れや最小限の反応などの言語行動

表2 自己呈示的連鎖に関する研究一覧

分析項目	プロセス	対象場面	論文(年代)	データ数	分析時間	データの性質
カテゴリ化	局所的	単一母語	Maynard & Zimmerman(1984)	15 (女 ² :5 ; 男 ² :5 ; 男女:5)	12分	実験室会話
		日台対照	張(2006b)	日・台:10(女 ²)	5分	実験室会話
情報要求発話	時間軸	日韓対照	奥山(2000)	日:7(女 ²)、 韓:12(女 ²)	40分	実験室会話
			奥山・泉(2001)	日:9(男 ²) 韓:14(男 ²)	40分	実験室会話
			奥山(2005)	日:7、韓:12(女 ²) 日:9、韓:14(男 ²)	40分	実験室会話
	母語場面 接触場面	佐々木(1996)	51の事例	20分	実験室会話	
		佐々木(1998)	54の事例	20分	実験室会話	
情報交換	局所的	単一母語	三牧(1999a)	20(女 ² :10 ; 男 ² :10)	15分	実験室会話
	時間軸	接触場面	樋口(1997)	日・日:7 ; 日・外:13	5分	実験室会話

「女²」とは女性ペアのこと、「男²」は男性ペアである。

表3 話題構成モデル

手順(procedure)	実現(realization)	語用論的原則(pragmatic principle)
話題の導入	話題の申し出、話題の指定あるいは 話題の最初の引き出し	計画できるもの、報告できるもの
話題の発展と 漸進的な転移	一貫した(coherent)発話と連続的な会話	局所的関連 前進的
話題の移行 適切箇所	沈黙の拡張(gap)、最小限の反応、繰り返し 評価、要約と概括	前進的 計画できるもの、報告できるもの
話題の飛躍 (topic leap)	焦点的、あるいは、局所的に一貫しない発話 (Non-focally or non locally coherent contribution)	局所的関連

(Svennevig 1999: 211 から John Benjamins Publishing Company の承諾のもとに引用。訳は筆者)

によって移行する。でなければ、話題の飛躍が起こる。つまり、話題構成モデルは、ある話題がどのように構成され、そして、どのように次の話題に移行するかという一連のプロセスである。

話題の導入の方法に関しては、次項 4.2.1 で述べていきたい。Svennevig(1999)は話題の披露を話題の指向性によって 5 つのタイプに区分した。話題披露を内容の観点からも考えるため、4.2.2 では、話題の内容についての研究を概観する⁹。

4.2.1 話題の導入・開始方法の研究

話題トーク(Topical talk)の成立に関して、Maynard & Zimmerman(1984)は会話の参与者の両方に責任が

あると主張している。話題トークは売買と似ており、話し手が招待状を提示してから、聞き手がそれを引き受けることによって、話題トークが成り立つからである。話題トークが成立しない場合は、聞き手が話したくない話題であるか、あるいは話題とすることを禁じているものと見なすことができる。

4.2.1.1 (局所的) 単一の母語場面の話題導入に関する研究

前述した Maynard & Zimmerman (1984)の研究では、友人関係のペアと初対面ペアでは、話題の導入の仕方に相違があると論じている。友人同士は共通の情報を持っているため、過去の経験や第三者に関する

ニュースから話題を始めることが観察された、という。逆に、初対面同士は共通基盤に欠けるため、質問一応答形式による話題先行連鎖から、会話者を特定するカテゴリー、あるいは、そのカテゴリーに付随した活動(category-bound activities)に関する会話を開始する。もし、(この質問一応答形式の)話題先行連鎖が初対面の間柄で言ってはいけないことをさぐるために用いられるとすれば、「言ってもいいこと」、または、もっと長い話題トークを可能にすることをさぐることにも役立つ。そして、そのやり方はカテゴリーに付随した活動における参加者間の共一成長性(co-membership)¹⁰と共一参与性(co-participation)を可視化することである。それと同時に、話題先行連鎖は、偶然に「親しいこと(affiliation)をすること」が起こる可能性に対する準備ともなり、それは、親密さを達成するやり方の一つとなる。(Maynard & Zimmerman 1984: 312)。そこで、親しいことをすることは、親密さの達成のもう一つの実践である。親しいことをすることは、会話参加者が互いに類似性を提示しあい、その類似性をさらなる自己露出(self-revealing:筆者訳)トークの展開のために使うことによって達成される(Maynard & Zimmerman 1984: 313)。

そして、三牧(1999b)の研究では、日本人男女の大学生の同性ペアを対象に、話題選択がどのように行われているかについて調査が行われた。調査の結果、初対面会話の内容の選択は、共通点を探し強調する、相違点に関心を示す、危険な話題を回避するなどのストラテジーが観察された。共通点および相違点への関心の表明そのものは「相手に関心を示すことになり、積極的ポライトネスに該当する(三牧 1999b: 57)。ただし、それらのストラテジーを実行するに当たって、消極的ポライトネスを伴うこともあるという。論文では言明されていないが、ポライトネス理論¹¹を用いて考察されていることから、初対面会話では、相手に関心を示すことによって関係性を築いていくというプロセスを筆者が想定していたことが予測される。

さらに、宇佐美(1993a, 1993b, 1994, 1996, 1998)、宇佐美・嶺田(1995)の一連の研究で、初対面会話の二者間における会話のストラテジーは、力関係、性別関係などの要因によって異なるという結果が示された。話題導入に関しては、目上の話者が多く行うという。そして、話題導入の形式に焦点をあてた結

果、相手の情報を引き出すための質問形式が使用される傾向が見られた。さらに、目上の人に対して、目下の話者の中途終了発話が多く観察された。これらの論文は、会話を通して対人関係を構築していくというより、既定される性別、社会的地位、年齢などの原因から、初対面会話に臨む姿勢が変わることを示唆している。

続いて、中井(2003a)は、日本語母語話者の話題開始について、情報提供者と協力者に分けて、それぞれの言語的表現を調べた。ある話題を提供する人が情報提供者とし、それを協力する相手が協力者とする。情報提供者と協力者の役割は絶えずに入れ替わり、固定していない(中井 2003a: 76)。言語的表現を調べた結果、「のだ」文を使うことによって、相手へ親近感を表し、話題への参加の度合いをより高めるという。さらに、楊(2005c)でも、日本語母語話者の話題開始の表現を調べ、「話題を際立たせる表現」「話題の認識を示す表現」「言いよどみ表現」「接続表現」「メタ言語表現」「呼びかけ表現」という 6 種類の話題導入の表現方法が見られた。ただし、楊(2005c)は話題の開始表現の方法のみに注目を置き、会話者相互の関係構築については触れていない。

4.2.1.2 (局所的)接触場面と母語場面の比較から見る話題開始部

最後に、母語場面と接触場面の比較をした中井(2003b, 2004)を紹介する。中井の一連の研究は、3 ペアの日本語母語場面と 5 ペアの日本語接触場面から、話題の開始部の言語的要素に注目している。中井(2004)は中井(2003a)と同様に話題の開始部分における二人の会話者を話題の提供者と協力者に分け、それぞれの言語的表現を抽出した。話題開始部での情報提供者の言語的表現に着目すると、非母語話者は終助詞と接続表現をあまり使用しないという。そのため、非母語話者は母語話者と会話する際に、話題を唐突に開始したりして、スムーズに転換できない。そして、中井(2003b)は話題開始部の第一発話に用いられている質問表現に注目し、母語話者ペアと母語・非母語話者ペアの相違を調べた。母語話者ペアは「情報提供話題開始型」と「相互型の質問一応答型」を使用する傾向があり、母語・非母語話者ペアの場合、「一方方向型の質問一応答型」である。それは、母語話者は接触場面において、非母語話者から情報を引き出し、共通点を見つけると共に、

非母語話者に積極的に会話に参加させようという意識が高かったという。中井の研究は、初対面会話の話題の開始部で用いられる言語的表現が、会話者の関係作りにどう関連するかに貢献していると言える。

以上から、すべての初対面会話における話題導入の形式としては、相手に対する質問と、その答えという応答パターンがしばしば登場することが特徴である。さらに、話題がさまざまな表現方法によって導入されることも明らかになった。どのように話題を導入するかによって、会話の相手との関係性が変わるという知見が得られたと考えられる。

4.2.2 話題の内容に関する研究

初対面会話では、どのような話題が適切あるいは不適切なのかが主な関心となる。話題内容を分析項目とした研究を概観してみると、本節で取り上げた「局所的／時間軸」というプロセスの分析観点に分類できないものが現れた。本項では、プロセスの観点を伴わない研究も紹介することとする。なぜなら、話題内容に関しては、プロセスという観点を伴わない研究が多くなされているため、一定の重要性が示されているからである。

研究の年代順と影響力を配慮し、まず、プロセスの観点を伴わない研究を取り上げ、初対面会話で交わされた話題の内容に注目する。次に、初対面会話がどのように変化したかという時間軸の観点を取り入れた研究に触れる。

4.2.2.1 プロセスの観点を伴っていないもの

以下は、プロセスに関係なく、話題が単純に出現したかどうか、どのような内容なのか、などについて研究されたものを紹介する。

4.2.2.1.1 単一の母語場面の研究

三牧(1999b)は文化によって一定の話題選択スキーマがあると指摘している。三牧は男女同性のペアから、同学年異学年の組み合わせに関わらず普遍的な初対面会話の話題選択肢リストを確認した。これによると、大学生活、所属、居住、共通点、出身、専門、進路、受験という8つのカテゴリーの中にはほぼ全ての話題が収まるという。さらに、共通の友人、出身地、学部、授業などの話題が上位4位に選択されていると述べている。

4.2.2.1.2 対照研究の研究¹²

三牧の研究を踏まえ、奥山(2000)は韓日の女子大学生を、奥山・泉(2001)は韓日の男子大学生を、謝(2005)は中日の女子大学生を対象に、それぞれ初対

面会話を対象とする対照研究を行った。しかし、いずれも明示的に各文化の話題選択スキーマを提示するには至らなかった。一方、話題選択スキーマを提示したものには張(印刷中)があり、台湾の女子大学生は日本人女子学生と同じような話題選択スキーマを持っていると報告している。

まず、奥山(2000)は韓国12組、日本7組の各40分間の会話を分析し、話題の数では日本人の方が多いことを明らかにした。そして、質問の形式から始まった話題を、「属性に関する話題」・「属性に派生する話題」・「非属性の話題」に分類し、会話の開始から5分間までの部分を分析の対象として、上記3種類の話題の出現頻度を調べた。属性に関する話題とは、「年齢、学年、居住地域、専攻などの大学生としての一人の人間に付帯する基本的な指標に関する話題」のことである。属性に派生する話題とは、「属性の話題が出た後でそれに派生して出てくる話題、例えば居住地から現在地まで来た方法や所属学部の男女比などの話題」である。非属性の話題とは「属性および属性に派生する話題ではないもの、すなわち、ボーイフレンドやアルバイト、就職に関するいわゆる私的な話題など」である(奥山 2000: 125)。属性に関する話題の転換は韓日で似通っているが、属性に派生する話題と非属性の話題に相違が見られた。さらに、自己開示から開始した話題内容では、韓日とも中間的自己開示¹³の割合がもっとも高かったという。

続いて、奥山・泉(2001)の調査では、同じく40分間の会話のうち、冒頭の5分間に注目して分析を行った。対象者は、男子大学生同士で、韓国14組、日本9組である。韓国人ペアでは、出現の高い順に専攻、兵役経験の有無(日本人ペアは観察されなかった)、年齢、入学年度(同じく日本人ペアでは観察されなかった)が観察された。日本人ペアの場合は、学年、名前、出身地(韓国では出現しなかった)であった。全ての話題内容を分類した結果、韓国人ペアの話題は多様に発展するが、日本人ペアの話題は大学生活に関する内容に終始していた。そして韓国人ペアは社会問題などについての意見表明まで話が進展したが、日本人ペアは感想を言い合うことに留まるという考察がなされている。ただし、それを裏付ける数量的な分析結果は示されていない。

謝(2005)では、分析結果が詳細に明示されておらず、中日とも身上的情報の話題が身上以外の話題よ

り多かったという事実のみを示している。一方、張(印刷中)は三牧(1999b)の話題選択スキーマを台湾の女子大学生と日本の女子大学生で検証を行った。張では、三牧(1999b)の話題選択肢リストにおける受験というカテゴリーは観察できなかったが、会話のデータから、新たに状況発話とその他という二つのカテゴリーを付け加えた。しかし、台湾と日本の相違を調査すると、下位の話題項目の内訳は多少異なるが、話題選択スキーマに関しては、ほぼ一致していた。

4.2.2.1.3 接触場面と母語場面の比較

アメリカ人を対象に、同文化の人と異文化の人との接触場面を取り上げ、相互行為の参与度(interaction involvement)と話題選択の関連について研究したものに Chen(1995)がある。Chen はアメリカ人大学生を相互行為参与スケールによって、高参与度グループと低参与度グループに分ける。そして、37 組の同文化ペアと 36 組の異文化ペアの 10 分間の初対面会話を収集した。そして、その初対面会話を名詞／代名詞フレーズという分析単位で、5 つの話題タイプでコーディングした。5 つの話題タイプとは、斬新なもの(brand new)、未使用のもの(unused)、テキスト的に引き出されるもの(textually evoked)、状況的に引き出されるもの(situationally evoked)、そして推論できるもの(plain inferable)である。高参与度グループと低参与度グループはそれぞれ、同文化と異文化環境において、異なる話題選択を行うという結果が見られた。高参与度の人は同文化の場面より、異文化場面の方でより多く状況的に引き出されるものを提起し、推論できるものを話題にする。一方、低参与度の人では、異文化場面は同文化場面より斬新なものと未使用のものの使用が少なかった。以上、接する相手の文化背景と相互行為の参与度によって、母語話者が異なる言語行動を取ることが分かる。

以上の対照研究から、初対面会話の内容は文化によって異なるものもあるが、全体的には共通することが多いことが分かった。さらに、文化背景が違う両者が出会うとき、同文化の人と多少違う話題選択をする傾向があることが示唆された。

4.2.2.2 プロセスの観点を伴っているもの

ここでは 4.2.2.1 と異なり、プロセスに伴って話題の変化を追った研究を紹介する。

4.2.2.2.1 (時間軸) 単一の母語場面の研究

Svennevig(1999)はどのような初対面会話が意気投合した間柄につながるかについて、二つの例を提示しながら説明を行った。一つはノルウェーに滞在中の二人の語学留学生(スウェーデン女性¹⁴⁾)によるレストランでの会話であり、もう一つは NPO 法人のジャーナル企業で働く男女のボランティアがある個人宅で交わした会話例である。語学留学生の話題の順序を見ると、「今、現在の話題」→「自己呈示連鎖の塊」→「他の塊」→「自己呈示連鎖の塊」となっている。自己呈示連鎖とは、4.1 で述べたように会話の相手のコミュニティーの属性や自伝的な情報などに関する一連のやりとりである。これが続く箇所が何カ所も登場する会話とは、いったいどのような会話なのだろうか。

Svennevig(1999)のデータでは、語学留学生は目前で展開される話題に关心を持たず、豊穣な(rich)話題に発展できないことが観察された。しかし、共有する場を維持するために、自己呈示連鎖を次々と持ち込まなければならぬことが分かった。

これに対して、ボランティアのペアでは対照的な現象が見られた。彼らは、語学留学生同様に「今、現在の話題」から開始したが、その後、彼らの自己呈示連鎖は語学留学生よりも少ない。豊穣な話題を多く生起したという。しかも、その豊穣な話題の発展に百科事典的な話題導入が多く使われて、共通の興味とコミュニティーに繋がる言語行動を行っていたことが分かった。

先述したものをまとめると、会話の開始には、「今、現在」の話題が出現しやすい。そして、その後の話題導入のタイプによって、両者の意気投合の度合いを測ることができる。

4.2.2.2.2 (時間軸) 対照研究の研究

実際の会話場面を対象に、プロセスと言う観点で分析した研究は、管見の限り少ない。しかし、アンケート調査の方法で研究を行った西田(1996)が参考になるため、ここでは例外として取り上げることにする。西田はアメリカ人と日本人学生を対象に、それぞれの時間帯(0-5 分、6-15 分、16-30 分)に、アンケートの中で話す話題と話すことのない話題を選択させた。0-5 分では、日米同様に表面的な話題に留まっている。しかし、日本側に選択された年齢、住所、家族構成といった項目はアメリカ人の間には現れなかった。次に、6-15 分の時間帯では、

日米の話題の数に相違が見られた。アメリカ人は 34 もの話題を選択肢として考えられるが、日本人の話題レパートリは 14 種にすぎない。一方、両方とも開始 5 分までの話題より親密な話題を選んでいた。最後に、16–30 分のものを比較すると、日本は比較的「非」個人的な話題が多い傾向が見られた。

張(2006a)は Svennevig(1999)、Tryggvason(2004)に倣い、すべての会話を「セッティングトピック」「百科事典的トピック」「自己に関するトピック」「相手に関するトピック」「第三者に関するトピック」に分類し、台湾と日本の相違を調べた。有意な差は見られなかつたものの、5 分ずつ話題の変化を追うと、15 分から 20 分の間に、日本人は自分を語る傾向が増え、台湾人は第三者あるいは相手に関する話題を語り続ける傾向が観察された。

張(印刷中)は、また台湾と日本の女子大生の会話データを基に、三牧(1999b)の話題選択肢リストを修正追加し、その 9 つの話題カテゴリーの時間の推移に伴う変化(5 分間単位)を追った。その結果、共通点としては、台湾と日本ともに所属に関する話題が早い段階で選択され、大学生活の話題が派生され終始選択されていた。そして、状況発話も会話開始の 5 分間内で連帯感作りに多用された。相違点として挙げられるのは、台湾グループは短時間で、学生という身分以外に出身と居住の話題を選択し、会話の相手を多方面から認識するようになっていたことである。一方、日本グループは、出身という話題の選択は台湾グループより遅く、会話の相手の縛張りに緩やかなペースで入っていく。つまり、同じ話題を異なる時間帯で選択することが、異なる関係作りのプロセスを歩むと言えよう。

上記の研究を総括的に観察してみると、話題の出現順序は時間によって現れやすいものがあると考えられる。さらに、文化グループによって時間の推移と共に、受け入れられる話題に相違があると言えよう。そして、母語場面である Svennevig(1999)の研究からは、どのような話題展開が盛り上がる会話であるかという示唆が得られた。上記の研究をまとめると、次頁の表 4 のようになる。

4.3 サイドシークエンスを切り口とする研究

サイドシークエンス¹⁵とは話の主流から逸脱した話の塊を指し、それを経てから、会話がまた主流の話に戻ることを指す。Svennevig(1999)によると、サイドシークエンスは会話者の親しさと連帯感を作る

ことに効果があると述べている。

初対面会話のサイドシークエンスの側面から研究されたものはあまり見当たらない。会話分析のタンテーキングの観点から共感を表す研究としては、町田(2002)の「初対面会話における発話の重なりの効果」一件のみである。町田(2002)は初対面の大学生二人一組で自由に 10 分から 15 分程会話をしてもらい、会話分析の手法で分析を行った。その結果、割り込みや割り込み相づちを使うことで初対面同士でも知識の共有性や身近さに依存していることを示していることが分かった。論文の最後に、会話者の心的距離の変化は発話の重なり以外に、日本語では文末形式のデス・マス体／ダ体と自称詞の移行にも関係があると考察している。ここでの対人関係構築のプロセスは局所的側面から扱われていると考えられる。

4.4 スピーチレベルシフトを切り口とする研究

日本語の初対面会話においては、親疎関係を表すために、スピーチレベルシフトがしばしば使用される。つまり、会話は両者の相互作用によって、発話が尊敬語・謙譲語(+レベル)、丁寧体(0 レベル)から、常体(-レベル)へシフトするのである。

4.4.1 (局所的) 単一の母語場面の研究

男女、上下関係などを要因として、日本人大学生の初対面会話のスピーチレベルシフトが多く研究されている(宇佐美 1995; 三牧 2002; 陳 2003; 橋本 2006)。

宇佐美(1995)では、男女の大学院生¹⁶一人ずつをベース対象者にして、それぞれに同性の目上、目下、同年代の人と会話をさせた。スピーチレベルシフトは、心理的文脈として使われ、親しみを表す・冗談を言うとき、相手のレベルと合わせるとき、新しい話題を導入する質問に答えるときに生じる。前二者(心理的文脈として使用することと親しみを表す・冗談を言うこと)では敬語が使用から不使用へシフトする一方、話題を導入される質問に答えるときは敬語不使用から使用へシフトする。そして、それぞれの社会的地位によって、スピーチレベルシフトの生起頻度が異なるという結果がまとめられた。

一方、同学年ペアと異学年ペア合計 37 ペアの 15 分間の初対面会話を調べたのが三牧(2002)である。その結果、社会的に同等の相手と会話するとき、同一のレベルを選択することが社会的規範として共有されていることが分かった(三牧 2002: 63)。三牧に

表4 話題に関する研究一覧

分析項目	プロセス	対象場面	論文(年代)	データ数 (組み合わせ)	分析時間	データの性質	
話題の導入・開始方法	局所的	単一母語	Maynard & Zimmerman(1984)	15 (女 ^{2.5} ; 男 ²⁵ ; 男女:5)	12分	実験室会話	
			三牧(1999b)	38 (同性、上下の組み合わせ)	15分	実験室会話	
			宇佐美(1993a, 1993b)	3(女 ²)	30分	実験室会話	
			宇佐美(1994) 宇佐美・嶺田(1995)	11 (男女、同性、上下の組み合わせ)	30分	実験室会話	
			宇佐美(1996, 1998)	72 (男女、同性、上下の組み合わせ)	15分	実験室会話	
			中井(2003a)	3(女 ² 、男 ² 、男女)	15分	実験室会話	
			楊(2005c)	11(女 ²)	20分	実験室会話	
		接觸場面	中井(2003b, 2004)	母語:3、接觸:5 (男女、同性の組み合わせ)	15分	実験室会話	
		対照研究	三牧(1999b)	38 (同性、上下の組み合わせ)	15分	実験室会話	
話題内容	なし		奥山(2000)	日:7(女 ²) 韓:12(女 ²)	5分	実験室会話	
			奥山・泉(2001)	日:9(男 ²) 韓:14(男 ²)	5分	実験室会話	
			謝(2005)	日:3(女 ²) 中:3(女 ²)	15分	実験質会話	
			張(印刷中)	日:10(女 ²) 台:10(女 ²)	20分	実験室会話	
			Chen(1995)	母語:37 接觸:36	10分	実験室会話	
	(時間軸あり)	单一母語	5 (同性、男女の組み合わせ)	35~63分	自然会話		
		対照研究	日:10(女 ²) 台:10(女 ²)	20分	実験室会話		

「女²」とは女性ペアのこと、「男²」は男性ペアである。

よると、普通体基調を選択することは、同学年の仲間意識を表すことであり、その反対に、丁寧体基調を設定するのは、疎の人間関係を表すことであるという。後者の場合、丁寧体から普通体へのスピーチレベルシフトによって、個人的な親しさが表示される。さらに、異学年の場合は、上下関係や親疎関係などのうち、どの要因を優先すべきかについては明確な基準がなく、各自がその都度判断しなければならない実態が、その研究から窺えた。

陳(2003)は、日本語母語話者の「ダ体発話」へのシフトの生起しやすい状況を調べた。結果として、八つの状況が提示された。それは、「相手の発話の一部を繰り返す時」、「先取りをする時」、「自己発話

に対して補足・例示をする時」、「情報内容の自己訂正を行う時」、「何かを思い出しながら話す時」、「適切な表現を模索する時」、「相手の発話内容に感嘆をする時」と「自分の心情を吐露する時」である。母語話者が無意識に「ダ体発話」へシフトを行うとき、そのシフトは親しみの表示、話しやすい雰囲気の醸成であると受け止められているという。では、そもそも大学生のスピーチレベルは丁寧体なのだろうか、それとも普通体なのだろうか。それを検証したのが橋本(2006)である。橋本は、宇佐美(1995)をもとにして、大学生のスピーチレベルシフトを分析した。その結果、大学生間の基本的スピーチレベルは丁寧体であるとは言えないことが分かった。つまり、大

学生は中間的スピーチレベルの使用で、丁寧度を保ちながら、親しさを表現するという。

4.4.2 (局所的)対照研究の研究

対照研究では、金(2002)が宇佐美(1995)の研究を参考に日韓の大学生の初対面会話のスピーチレベルシフトを調査した。金(2002)は、スピーチレベルシフトのありようを、時間軸に沿ってダイナミズムを見る方法ではなく、「双方の話者がどのようにスピーチレベルシフトを用いたかに着目し、そのダイナミズムを探る方法」(金 2002: 54)を取って分析した。年齢差のあるペアの会話と年齢差のないペアの会話では、日韓で初対面という社会条件を重視するか、そして年齢差を重視するかが異なるという。年齢差のあるペアの会話において、日本語では初対面という条件が先立ち、韓国語では年齢差が優先に考慮される(金 2002: 82)。そして、年齢差のないペアの会話では、反対の結果である。

4.4.3 (局所的)接触場面と母語場面の比較

さらに、接触場面における日本語学習者のスピーチレベルシフトに関しては、陳(2004)が中国語母語話者の特徴を調べた。陳(2004)は、台湾人と日本人の接触場面におけるスピーチレベルシフトを母語会話のものと比較した。台湾人上級日本語学習者は初対面会話において、基本レベルがデス・マス体の発話であるとき、ダ体発話にシフトしたまま、発話を続ける傾向が母語会話より強かった。さらに、上級日本語学習者の「ダ体発話」へのシフトが現れても、母語話者と同様に心的距離の短縮というコミュニケーションの効果をもたらすとは限らないという。対人関係ではスピーチレベルシフトは非常に重要であり、それに関する知識を日本語学習者に熟知させる必要があることを指摘した。

以上の研究の中では、局所的なスピーチレベルシフトを見ることが殆どであったが、伊集院(2001, 2004)は時間軸の観点を入れて分析を行っている。

4.4.4 (時間軸)接触場面と母語場面の比較

伊集院(2001, 2004)は母語場面ペアと日本人対中国人の接触場面ペアの日本人のスピーチレベルを 5 つの時間ステージの変化で調べた。母語場面の「ダ体へのシフトの要因となったのは、共通話題や身近な話題、共感の発生による」現象であると述べている(伊集院 2001: 6)。接触場面においては、心的距離を短縮するというより、学習者のコミュニケーションに対する理解度によって、命題の伝達が焦点に

なって、ダ体が用いられたことが分かった。

以上、スピーチレベルシフトに関する研究をまとめるに、初対面の両者自身が持っている社会的条件によって、スピーチレベルの設定が最初に行われるが、会話の相互交流によって、親しみなどを表すとき、シフトが生じられるという傾向が見られた。しかし、日本語学習者は同様に感じるとは限らない。先述した研究を次頁の表 5 にまとめる。

上述した研究は、全てポライトネス理論に関連するものである。三牧(1999b)の話題選択、奥山(2000, 2001, 2005)の自己開示／質問による話題導入などに關しても、ポライトネス理論を用いて考察がなされている。これらのことから、初対面会話研究では、ポライトネスがどのように働きかけているかをさらに追求する必要があるが、これに関しては稿を改めたい。

4.5 まとめ

本章は Svennevig(1999)の知見から、「自己呈示的連鎖」、「話題」、「サイドシーケンス」という観点に、日本語の特徴である「スピーチレベルシフト」を加えて、初対面会話の関係構築プロセスの分析の切り口とした。そして、それぞれの分析項目に従つて、プロセスの分析観点に、母語場面、対照研究、接触場面に分けて研究を概観した。Svennevig は初対面会話から主に局所的に会話分析を行い、対人関係の構築のプロセスを明らかにした。しかし、概観した他の研究では、局所的なものに加え、時間軸の観点のものもあった。以下、この章で概観した研究を次頁の表 6 にまとめる。

表 6 から分かるように初対面の対人関係構築は、話題の導入方法と話題内容について多くの研究がなされている。初対面の人と知り合うための情報収集という手段に関する研究も多く見られた。なぜ話題に関連する研究が多いかというと、初期の初対面会話研究に關連しているためと思われる。初対面会話は、社会心理学の分野で自己開示という観点から研究されている。すなわち、話題内容に応じて自己開示の深さが変わるのである。従つて、談話分析という異なる手法から初対面会話を分析する際においても、話された内容に注目が向けられたと言えよう。また、初対面会話における情報収集に関する研究がなぜ現れたかについては、不確実性減少とカテゴリー形成の理論から解釈ができる。そのため、本稿は会話データの分析研究を対象にしたが、社会心理学

表5 スピーチレベルシフトに関する研究

分析項目	プロセス	対象場面	論文(年代)	データ数 (組み合わせ)	分析時間	データの性質
スピーチレベルシフト	局所的	単一母語	宇佐美(1995)	11(男女、上下の組み合わせ)	30分	実験室会話
			三牧(2002)	37(同性、上下の組み合わせ)	15分	実験室会話
			陳(2003)	8(同性、男女の組み合わせ)	21~33分	実験室会話
		対照研究	橋本(2006)	8(男女、上下の組み合わせ)	15分	実験室会話
			金(2002)	12(男女、上下の組み合わせ)	5分	実験室会話
	時間軸	接触場面+ α	陳(2004)	母語:8 接触:16	21~67分	実験室会話
			伊集院(2001, 2004)	母語:4 接触:8	15分	実験室会話

表6 関係構築分析のアプローチから見た初対面会話研究のまとめ

切り口	分析項目	プロセス	対象場面		
			単一の母語場面	対照研究	接触場面+ α
自己呈示的連鎖	カテゴリー化	局所的	Maynard & Zimmerman(1984)	張(2006b)	
	情報要求発話	時間軸		奥山(2000, 2005) 奥山・泉(2001)	佐々木(1996, 1998)
	情報交換	局所的	三牧(1999a)		
		時間軸			樋口(1997)
話題	話題の導入・開始方法	局所的	Maynard & Zimmerman(1984) 三牧(1999b) 宇佐美(1993a, 1993b, 1994, 1996, 1998) 宇佐美・嶺田(1995) 中井(2003a) 楊(2005c)		中井(2003b, 2004)
	話題内容	なし	三牧(1999b)	奥山(2000, 2005) 奥山・泉(2001) 謝(2005) 張(印刷中)	Chen(1995)
		時間軸	Svennevig(1999)	【ア】西田(1996) 張(2006a) 張(印刷中)	
サイドシーケンス	発話の重なり	局所的		町田(2002)	
スピーチレベルシフト	スピーチレベルシフト	局所的	宇佐美(1995) 三牧(2002) 陳(2003) 橋本(2006)	金(2002)	陳(2004)
		時間軸			伊集院(2001, 2004)

【ア】とは、アンケート調査による研究である。

における自己開示と不確実性減少理論から得られる理論背景の知見も多いと思われ、決して無視してはならないと認識している。

5. おわりに

今回のレビューを通して、初対面会話における関係構築の研究について、研究対象、プロセスという分析観点、そしてデータの収集という三つ側面から提案したい。

まず、概観した研究の対象に着目すると、単一の母語場面のものと対照研究のものが多く、接触場面から初対面会話を分析するものが少ない、という現状がある。つまり、今まで母語場面でのルールを接触場面に適用して説明する傾向が見られた。しかし、接触場面では、単に会話者 A あるいは会話者 B の母語場面のルールに従うのではなく、第三のルールを両者で作り出す場合もある。そのため、母語場面で得られた結果からの推測以外にも、接触場面独特の特徴を明らかにする研究が肝要である。つまり、冒頭で示した対談のように、留学生と日本人学生の初対面会話に示唆を得るためにには、それぞれの母語での会話と両者が接触した場面の会話の双方から探求する必要があるだろう。

次に、プロセスという分析観点について検討する。本稿はプロセスという概念を各研究によって局所的なものもしくは時間軸によるものかによって、再度区分をした。まとめた表6を分析してみると、局所的な研究が多く見られる。本稿で概観の枠組みとして使った Svennevig(1999)の研究も局所的な分析が中心になっていたが、上記の研究とは明らかに違う点が一つある。それは、Svennevig の研究は、初対面会話の局所的なムーブを分析した上で、それらのムーブによって会話参加者の間にどのような人間関係が築かれていくかという問い合わせに沿って、解釈が加えられているところである。しかし、それ以外の研究は人間関係の構築に対する解釈がやや不十分である。そして、局所的な観点だけではなく、より広い角度から初対面会話を観察し、時間軸の推移による変化の研究をより多く行うことで、多くの示唆が得られると考えられる。従って、今後は人間関係構築における時間軸の推移というプロセスを重視した研究も充実させていく必要がある。

最後に、表 2、表 4、表 5 から分かるように、初対面会話に関する分析データは、Svennevig(1999)を

除けばコントロール性が強く自然とは言い難い実験室で収集したものが殆どである。それは、自然環境における初対面会話をデータ化するのが難しいことが一因として考えられる。Svennevig(1999)は自然な初対面会話のデータから、会話分析と談話分析の手法を駆使し、初対面会話の全貌を明らかにした一集大成だと言える。生活や社会と切り離していないデータの方がより現実的な現象を解釈することができる。しかし、対照研究や接觸場面の研究は、データ間の比較対照をしなければならないため、一定の要因を操作し、実験室で会話収集を行うことは避けられないだろう。西郡(2002)は、実験室で自然な初対面会話の収集のため、「偶然の初対面」という方法を提唱した。「偶然の初対面」会話とはたまたまある場所に居合わせた二人の会話を採集したもの指す。偶然の初対面会話から、「待遇表現のレベルを決めるのに必要な相手の属性情報をどのように入手するか、ポライトネス的見地からの談話のストラテジー、心理学的自己開示の様子、初対面印象形成等々の分析」ができるという(西郡 2002: 2)。それぞれの方法によって、相互に補完する形で初対面会話の全貌を明らかにすることを期待したい。一方、実験室による初対面会話から得た結果を、現実社会における真の初対面会話の中で検証する試みを持ちたい。

以上、本稿は初対面会話における関係構築のプロセスについての研究を概観してきた。取りあげた研究では、調査対象である会話データの長さがそれぞれ異なる。そこで、それらの結果が同一視できるかどうかについては、また稿を改めたい。さらに、初対面会話は世代、あるいは時代背景によって変化するとも言われている。引き続き検証することを今後の課題とする。

注

1. 独立行政法人日本学生支援機構による留学生の受け入れの概況(平成 18 年度版)のデータである。
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data06.html(2007 年 5 月 17 日検索)
2. 社会浸透理論は、会話者両者間の相互作用(行動の交換、つまり自己開示の内容交換)が表面的なレベルから親密なレベルへ進み、対人関係が親密化していく過程を社会的浸透という用語で表現している(深田 1998: 100)。
3. 無論、スムーズでない初対面会話を経験しても、親密な関係になる場合もあることは否定できない。ただし、それは一定の頻度の付き合いが前提となり、なんらか

- のきっかけで変化がもたらされるものだと考えられる。一定頻度の付き合いが保障されない場合、初対面会話が以降の関係構築を左右する大きな役割をすると思われる。
4. 社会心理学の分野では、「返報性」という訳語を使用しているが、談話分析分野では、「互恵性」という訳語が多く見られる。本稿では、それぞれの領域によって reciprocity の訳語を使い分けることにする。
 5. この非母語話者は、韓国、中国、オーストラリア、アメリカ、メキシコ、フランスというバリエーションに富んだ集まりである。
 6. 管見の限り、初対面会話を体系的に分析したものは、Svennevig(1999)のみで、彼の知見を多く取り上げるのも、そのためである。
 7. Svennevig(1999)では、ノルウェー語とスウェーデン語を分析対象にしたものである。ノルウェー語とスウェーデン語では、スピーチレベルがソフトする言語かどうかについて現段階では確認できない状態である。
 8. 注4の解説を参照されたい。
 9. 話題の転換に関するレビューは2005年度版の『第二言語習得・教育の研究最前線』の楊(2005a)を参照されたい。楊(2004, 2005b)は中日の女子大生の初対面会話における話題転換の相違について研究している。
 10. 「共一員性」とは、会話者たちが互いに同じカテゴリーの扱い手であることを言う。「共通の員性」とも呼ばれる(串田 2006: 38)。
 11. 「ポライトネス」とは、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」すべてを指すものである(宇佐美まゆみ 2002)。
 12. 補足であるが、アンケートの研究では、熊谷・石井(2005)と洪(2006)が日韓の初対面会話の話題選択について調査を行っていた。
 13. 「中間的自己開示」とは、肯定的(大学生として相手に誇れるような行為)でもなく、否定的(大学生として相手に誇れず、否定的な印象を与えてしまう恐れるある行為)でもない、中間的な意味合いでだけをもつ、自己に関する情報のみを伝える開示行動である。
 14. 本文には明示されていないが、謝辞から、二人の留学生は自分の母国語であるスウェーデン語で会話を交わしたこと分かる。
 15. 串田(2006)では、サイドシークエンス(side sequence)を「脇道連鎖」と訳している(p63)。
 16. この対象者は大学院生であり、年齢は30代後半である。

参考文献

- 伊集院郁子 (2001) 「初対面会話におけるスピーチスタイルの選択—母語場面と接觸場面の比較」 横浜「言語と人間」研究会10月例会発表資料, 1-12.
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接觸場面の相違—」 『社会言語科学』 6(2), 12-26.
- 宇佐美まゆみ (1993a) 「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」 『学苑』 647, 37-47.
- 宇佐美まゆみ (1993b) 「初対面の二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違—日本語の場合」 『ヒューマン・コミュニケーション研究』 21, 25-40.
- 宇佐美まゆみ (1994) 「性差か力(power)の差か—初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より—」 『ことば』 15, 53-67.
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用ースピーチレベルシフト生起の条件と機能—」 『学苑』 662, 27-42.
- 宇佐美まゆみ (1996) 「初対面両者間における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」 『ことば』 17, 44-57.
- 宇佐美まゆみ (1998) 「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」」 『ヒューマン・コミュニケーション研究』 26, 50-61.
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面両者の会話分析より—」 『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』 2, 130-146.
- 宇佐美まゆみ (2002) 「連載 ポライトネス理論の展開①ポライトネスという概念」 『月刊言語』 31(I), 100-105.
- 榎本博明 (1997) 『自己開示の心理学的研究』 北大路書房
- 大坊郁夫 (2005) 「社会的場面における人間の非言語的な行動と親和性の向上」 『バイオメカニズム学会誌』 29(3), 118-123.
- 奥山洋子 (2000) 「韓・日同国人女子大学生同士の初対面の会話—質問及び自己開示の時間帯による分析を中心にして」 『日本學報』 45, 117-132.
- 奥山洋子・泉千春 (2001) 「韓・日同国人男子大学生同士の初対面会話—情報収集としての質問と自己開示を中心にして」 『日本學報』 49, 197-209.
- 奥山洋子 (2005) 「話題導入における日韓のポライトネス・ストラテジー比較—日本と韓国の大学生初対面会話資料を中心に—」 『社会言語科学』 8(1), 69-81.
- 金珍娥 (2002) 「日本語と韓国語における談話ストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」 『朝鮮学報』 183, 51-91.
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析 「話し手」と「共一員性」をめぐる参加の組織化』 世界思想社
- 熊谷智子・石井恵理子 (2005) 「会話における話題の選択—若年層を中心とする日本人と韓国人への調査から—」 『社会言語科学』 8(I), 93-105.
- 佐々木由美 (1996) 「日本人大学生の異文化間コミュニケーションスタイル—アメリカ人・中国人との日本語会話における「情報要求」発話分析—」 『言語文化と日本語教育』 11, 37-47.

- 佐々木由美 (1998) 「初対面の状況における日本人の「情報要求」発話—同文化内および異文化間コミュニケーションの場面—」『異文化間教育』12, 110-127.
- 謝韻 (2005) 「日本人女子大学生同士と中国人女子大学生同士の初対面会話」『日本中国語学会第55回全国大会 予稿集』296-300.
- 曹偉琴 (1992) 「日中両国間の発話行為の比較対照」『日本語教育学学会秋季大会 予稿集』1-6.
- 多文化共生マガジンJ-Life (2005) 「J-Life的Q&A [ニッポンの問題] 第2回「日本人とのコミュニケーションは難しい」」『多文化共生マガジンJ-Life』2, 22.
- 張瑜珊 (2005) 『初対面会話の台・日の対照研究—女子大生の場合』お茶の水女子大学日本語教育コース修士論文(未公刊)
- 張瑜珊 (2006a) 「台湾と日本の女子大生同士における初対面会話の対照研究—話題選択について—」『言語文化と日本語教育』31, 第31回日本言語文化学研究会発表要旨, 110-113.
- 張瑜珊 (2006b) 「台日女子大生による初対面会話の対照分析—初対面会話フレームの提案を目指して—」『人間文化論叢』9, 223-233.
- 張瑜珊 (印刷中) 「台湾の女子大生同士と日本の女子大生同士の初対面会話の対照分析—会話の内容面について—」『日本学框架下的日本语言文化研究』清华大学出版社
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフトー生起しやすい状況とその頻度をめぐってー」『日本語科学』14, 7-28.
- 陳文敏 (2004) 「台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフトー日本語母語話者同士による会話との比較ー」『日本語教育論集』20, 18-33.
- 中井陽子 (2003a) 「初対面日本語会話の話題開始部／終了部において用いられる言語的要素」『早稲田日本語教育研究センター紀要』16, 71-95.
- 中井陽子 (2003b) 「話題開始部で用いられる質問表現ー日本語母語話者同士および母語話者／非母語話者による会話をもとに」『早稲田大学日本語教育研究』2, 37-54.
- 中井陽子 (2004) 「話題開始部／終了部で用いられる言語的要素ー母語話者及び非母語話者の情報提供者の場合ー」『講座日本語教育』40, 3-26.
- 中村陽吉 (1990) 『「自己過程」の社会心理学』東京大学出版会
- 中山晶子 (2003) 『くろしおカイブックス5 親しさのコミュニケーション』くろしお出版
- 西郡仁朗 (2002) 「自然会話データ 『偶然の初対面の会話』ーその方法論についてー」『人文学報』330, 1-18.(転載: 文部科学省科学研究費報告書(基盤研究C(2)) 研究代表者: 宇佐美まゆみ 2003年 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』)
- 西田司 (1996) 「初対面30分間の話題にみる日米の自己開示」『国際関係研究 国際文化編16』17(2), 39-55.
- 西田司 (2004) 『対人コミュニケーション学の新視点 不確実性の理論』創元社
- 橋本拓郎 (2006) 「日本人学生の初対面会話におけるスピーチレベルの機能ー中間的なスピーチレベルの分析を基にー」『言語と文明』4, 77-102.
- 樋口斉子 (1997) 「初対面会話での話題の展開」西郡 仁朗(代表)『日本人の談話行動のスクリプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作 基盤研究(C)』75-93.
- 深田博己 (1998) 『インターパーソナルコミュニケーション 対人コミュニケーションの心理学』北大路書房
- 洪珉杓 (2006) 「日韓両国人の言語行動の違い②—初対面の言語行動の日韓研究ー」『日本語学』25(6), 82-89.
- 町田佳世子 (2002) 「初対面の会話における発話の重なりの効果」『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』15, 189-210.
- 三牧陽子 (1999a) 「初対面インターアクションにみる情報交換の対称性と非対称性ー異学年大学生間の会話の分析ー」吉田彌壽夫先生古稀記念論集編集委員会(編)『日本語の地平線 吉田彌壽夫先生古稀記念論集』くろしお出版 363-376.
- 三牧陽子 (1999b) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジーー大学生会話の分析ー」『日本語教育』103, 49-58.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者話者間のポライトネス表示ー初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心にー」『社会言語科学』5(1), 56-74.
- 三矢真由美 (1995) 「話題の適切性と自己開示度ー日本人与中国人の比較ー」『日本語教育学会春季大会 予稿集』151-156.
- 守崎誠一・内藤伊都子 (2007) 「同性二者間に見られる自己開示の返報性と総量ー親密度と文化の影響ー」『異文化間教育』25, 74-89.
- 山中一英 (1995) 「対人関係の親密化過程に関する質的データに基づく一考察」『名古屋大学教育学部紀要、教育心理学科』42, 127-134.
- 山中一英 (1998) 「大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究」『社会心理研究』13(2), 93-102.
- 山中一英・廣岡秀一 (1994) 「大学生の対人関係の親密化過程に関する研究(4)」『日本社会心理学会第35回大会発表論文集』306-307.
- 楊虹 (2004) 『接触場面における中日母語話者の話題転換ストラテジー』お茶の水女子大学日本語教育コース修士論文(未公刊)
- 楊虹 (2005a) 「話題転換研究の概観ータイプと方略を中心にしてー」『第二言語習得・教育の研究最前線—2005年版ー』日本文化と日本語教育2005年11月増刊特集号, 159-185.
- 楊虹 (2005b) 「中日接触場面の話題転換ー中国語母語話者

- に注目して」『言語文化と日本語教育』30, 31-40.
- 楊虹 (2005c)「日本語母語場面の会話に見られる話題開始表現」『人間文化論叢』8, 327-336.
- 横田雅弘 (1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5, 81-97.
- Barnlund, D. C. (1975) *Public and private self in Japan and the United States: communicative styles of two cultures*, Tokyo: Simul Press. (西山千、佐野雅子(訳)1979『日本人の表現構造:公的自己と私的自己—アメリカ人ととの比較新版』サイマル出版会)
- Berg, J. H. & Clark, M. S. (1986) Chapter6: Differences in social exchange between intimate and other relationships: Gradually evolving or quickly apparent?, In V. Derlega & B. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*, NY: Springer Verlag, 101-128.
- Berger, C. R. & Calabrese, R. J. (1975) Some explorations in initial interaction and beyond: Toward a developmental theory of interpersonal communication, *Human Communication Research*, 1(2), 99-112.
- Chen, L. (1995) Interaction involvement and patterns of topical talk: A comparison of intercultural and intracultural dyads, *International Journal of Intercultural Relation*, 19, 463-482.
- Dindia, K. & Fitzpatrick, M. A. & Kenny, D. A. (1997) Self-disclosure in spouse and stranger interaction: A social relations analysis, *Human Communication Research*, 23, 388-412.
- Goffman, E. (1959) *The presentation of self in everyday life*, NY: Doubleday
- Kellermann, K. & Broetzmann, S. & Lim, T. & Kitao, K. (1989) The conversation MOP: Scenes in the stream of discourse, *Discourse Processes*. 12(1), 27-61.
- Kellermann, K. & Lim, T. S. (1989) Conversational acquaintance: The flexibility of routinized behaviors, In B. Dervin, L. Grossberg, B. O'keefe, & E. Wartella (Eds.), *Rethinking communication Vol.2: Paradigm Exemplars*, London: Sage, 172-187.
- Maynard, D. W. & Zimmerman D. H. (1984) Topical talk, ritual and the social organization of relationships, *Social Psychology Quarterly*, 47, 301-316.
- Svennevig, J. (1999) *Getting acquainted in conversation: A study of initial interactions*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Tryggvason, M. T. (2004) Comparison of topic organization in Finnish, Swedish-Finnish, and Swedish Family discourse, *Discourse Processes*, 37(3), 225-248.

ちよう ゆさん／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
yusan52@gmail.com

Overview of research regarding the process of constructing interpersonal relationship in the initial interaction

— Focusing upon actual conversations —

CHANG Yusun

Abstract

First impressions are important for constructing interpersonal relationships. Besides appearance, behavior, and other factors, it has been proven that people will be influenced by the conversation itself in the initial interactions. Globalization is bringing Japanese university students in contact with foreign students more often than in the past. It can be determined that initial conversations between them may have some influence on their future relationships. So, I will focus on the papers whose research data is real first meeting conversations between university students. I will try to discover what types of viewpoints have been examined in order to build a mechanism which shows the construction of the personal relationship process in the initial interactions. Then I will discuss which areas have been well researched and which areas have not.

At first, I will introduce a brief background history of the research into initial interactions. First conversations were originally studied by social psychologists and interpersonal communication analysts through questionnaires. Recently, both the process and procedures have been more thoroughly examined by sociolinguists. I will concentrate on the viewpoint of this process and I will give an overview of all papers discussing first meeting conversations.

I found two main approaches that researchers use in describing the process of constructing personal relationships. I have labeled the first “the structure approach”, and the second I have named “the relationship construction approach”. The latter is supported by Svennevig (1999)’s model of identity and social relations. According to the research methods, I have divided the relationship construction approach into two viewpoints. One of them is to identify some local behaviors within conversations relating to relationship construction, and the other is to indicate how some actions change during the time flow. I call these two viewpoints “the local part” and “the time table”, respectively.

Next, I provide an overview the research relating to first conversations in a framework that I created. Based on Svennevig(1999)’s assertion, I point out three perspectives: “The self-presentational sequence”, “topic introduction”, and “side sequences”. Japanese control their speech level to show intimate attitudes, so it is necessary to add the “speech level shift” as a fourth perspective into the framework. For each perspective I then classify the research based on the nature of the data (native situation, contrastive study, or contact situation) and the analytical viewpoint (the local part or the time table).

Finally, I point out that there is a lot of research on native situations and contrastive studies, but very little on contact situations. There are many researchers who focus on the viewpoint of local behavior than who examine how actions change over time. To fulfill the initial interaction’s mechanism between two university students, it is necessary to examine this neglected area.

【Keywords】interpersonal relationship, first conversation, relationship construction, local/time table, topics

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)

初次見面對話中人際關係形成的研究論文述評

－以分析實際會話資料的研究為主－

張 瑜珊

摘要

本篇述評主要是宏觀現有關於初次見面對話的研究論文。此論文的概觀範圍只要是以大學生為研究對象的論文為主，藉著此述評我將指出現今有關大學生初次見面對話的研究觀點與分析方向，然後期望此篇論文述評能夠對今後日本人與留學生初次見面時對話的研究提供一些研究方向的建議。在概觀現有的研究論文時，我依據 Svennevig(1999)在書中所提到的分析觀點，並且配合一般人皆能預知在初次見面時人際關係形成過程的行為活動，建構了一個「初次見面人際關係構築過程」的裝置框架。依尋著此框架結構我將所蒐集到的論文加以分類敘述。

本篇的論文述評的章節簡介如下。首先，我指出許多留學生在日本社會中常常感覺到與日本學生做朋友是困難的。以這個問題為出發點，我認為兩者的第一次對話可能占有相當大的影響力，因此開始著手於初次見面對話研究論文的收集。接著，我針對初次見面對話的研究學術背景，做一個順時性的說明。社會心理學家最早開始於這方面的研究，其後我們可以看到人際溝通學的學者的出現。但是這些學者的研究，大多以問卷調查為主。社會語言學家認為心理學的並不能表示會出現在實際的行動上，因此著重於利用實際的會話作為分析資料。在這樣的研究趨勢中，我也以分析實際會話資料的研究為主，並針對初次見面人際關係形成過程的分析手法加以分類說明。從其中，我指出分析人際關係形成過程的手法可分門別類為「構造分析手法」與「關係構築手法」。在關係構築手法裡，亦可看出研究學者是著重於局部性行動的特質還是行動的時間軸變化。

在第四章節中，根據收集來文獻的分析切入觀點的不同，我再將「關係構築手法」細部分類成四個不同的種類。這些種類分別有自我提示的會話連鎖，話題，離開正題的會話連鎖，與說話禮貌水平位置的改變。讓這四個切入觀點作為一個初次見面人際關係構築過程的敘述框架，概觀這次蒐集到與初次見面會話有關的研究文獻。每個切入觀點內，會因為分析項目的不同，而有再下一層分類。在每個分析項目中，我依著局部的／時間軸的關係建構的過程的分析觀點，還有每個研究的分析對象是母語場面的，對照分析的，還是日本人與外國人互相接觸下的，個別分類來敘述。最後，我根據以上宏觀的結果，指出現在研究的動向，並且對於今後留學生與日本人的初次見面對話研究做一個建言。

【關鍵詞】人際關係、 初次見面對話、 關係形成的過程、 局部的／時間軸、 話題

(御茶水女子大學研究所博士班 應用日本語言論講座)